慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーサー・ヤングの『フランス紀行』について
Sub Title	A propos de "Voyages en France" d'Arthur Young
Author	宮崎, 洋(Miyazaki, Hiroshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.2 (1974. 12) ,p.57(173)- 78(194)
JaLC DOI	
Abstract	Il va sans dire que "Voyages en France" d'Arthur Young est un des plus importants parmi les documents historiques traitant de la societe francaise du XVIIIe siecle. Les historiens francais depuis Tocqueville l'ont cite dans leurs oeuvres. Tout d'abord, nous etudierons ici la vie et la carriere d'Arthur Young, les raisons et les circonstances de ses voyages. Il vint en France sur l'invitation de Lazowski qui fut precepteur de la Rochefoucauld. Ensuite, nous etudierons l'aspect documentaire de "Voyages en France". On sait que cet ouvrage est un document d'histoire de l'agriculture. Nous traiterons de ses autres aspects. Dans son fond, l'ouvrage possede un trait de la personalite de Young ; de plus l'esprit de la nation anglaise, la geographic historique, les moeurs et les coutumes de la fin de l'ancien regime et le temoignage de la Revolution francaise marquent l'oeuvre. Nous le montrerons par maints exemples. Puis nous etudierons son influence litteraire. Par exemple, Stendhal ecrivit dans son journal a la date du 31 mars 1810 : A. Young reveille le desir de voyager en France, son livre a la main, mais il faudrait aussi avoir une passion dans le coeur pour y trouver autant de passion que lui...Nous ferions une description du caractere francais dans les diverses provinces du pays. Enfin, nous etudierons comment et dans quelle mesure "Voyages en France" a ete utilise dans les ouvrages principaux de George Lefebvre, ceux qui traitent de la fin de l'ancien regime et du debut de la Revolution francaise. Il est evident que Lefebvre utilisa plutot que les documents d'histoire de l'agriculture, ceux sur les moeurs et les coutumes et les temoignages sur la Revolution. C'est pourquoi l'interet de "Voyages en France" deborde largement le cadre de l'histoire de l'agriculture.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19741200-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーサー・ヤングの『フランス紀行』について

宮崎洋

ここに紹介する『フランス紀行』は原書を Travels in France という英語で書かれた旅行記で、フランス絶対王政の末期から革命初期、すなわち一七八七年から一七九〇年までのフランスを対象にしている。著者はイギリスの農学者アーサー・ヤング Arthur Young で、この旅行記の初版が一七九二年イギリスで刊行されて以来、ヤングの『フランス紀行』として、これまでフランス史の研究者の間では定評のある重要な史料をなしてきた。歴史研究の史料として本格的に利用されたのは、おそらく一八五〇年に刊行されたトクヴィルの『アンシァン・レジームと革命』(L'Ancien Régime et la Révolution) 以来であり、[1] 今日でも、しばしば利用されている。日本でも、たとえば柴田三千雄氏の『フランス絶対主義論』[2]、最近では平岡昇氏の『平等に憑かれた人々』[3] に引用されている。

註

(1) M. Lesage, Avertissement du traducteur p. I (dans Voyages en France pendant les années 1787-88-89 et 90.)

(2) 柴田三千雄著『フランス絶対王政論』御茶の水書房、一九六〇年刊、一四一頁以下。

(3) 平岡昇著『平等に憑かれた人々』岩波書店、一九七三年刊、一〇一―一〇二頁

(I)

さて、説明の順序として、原著者アーサー・ヤングの経歴と『フランス紀行』執筆のいきさつから始めよう。[4] ヤングは一七四一年ロンドンにサファク州の地主の長男として生れた。少年時代には、古典文法学校に通学したが、大学へ行かず、ある商社に見習いにやられた。しかし、生れつき好奇心の強かったヤングは商社勤めにあきたらず、ロン

ドンへ出て雑誌を創刊したこともあったが、結局尾羽打ち枯して一七六三年サファク州の自宅にもどってきた。当時、ヤングの自宅があったイギリス東北部ではかぶら農法が導入されて、農業経営上の一大改良がおこなわれていた。もともと地主の子であったヤングは、おそらくこの動きに影響を受けて農業に関心をいだくようになった。その年、彼は母の所有する八〇エーカーの土地で初めて農業経営に乗りだした。しかし、彼は経営そのものより農作物の実験に没頭し、その結果経営不振に陥って、土地を人手に渡さねばならなかった。これがヤングにとって農業経営の失敗の始まりであり、終生経営で成功することはなかった。それもそのはずで、土地を手に入れると、もっぱら実験に熱中し、たとえば最初の土地だけで三〇〇〇もの実験を手がけたといわれている。(5) しかし、この失敗のくりかえしの結果、皮肉なことにヤングは有名になっていくのであった。それは、経営に失敗すると、新しい土地を求めて歩き回る際に、実践的な農法にまつわる色々な知識を書きためては見聞記という形で刊行したことにある。すなわち、

一七六八年の『イングランド及びウェールズの南部諸州六週間紀行』(Six Weeks Tour through the Southern Countries of England and Wales)、七〇年の『イングランド北部の六ケ月紀行』(Six Months Tour through the North of England)、七一年の『農業資本家によるイングランド東部紀行』(Farmer's Tour through the East of England) といった労作が彼を有名にしていくのであった。当時すでに、イギリス国内を旅行してその印象記を公表することは、文学や地誌に関心をいだく人々には目新しいことではなかった。しかし、ヤングの登場以前には、実践的な農法という観点からくわしい見聞記を書いた人が皆無であったのだ。(6)

かくて、彼はここに農業経営から離れて、しだいに農業問題の文筆活動へと移って行く。多作で筆の早い彼は、七四年自分自身で数ある労作の中で一番できがよいとみなしている農政理論を扱った『政治算術』(Political Arithmetic) で大成功をおさめ、その結果王立学会の会員に選ばれたほか、ドイツ・イタリヤ等の農業学会でも会員に選ば

れ、今や彼の名声は大陸にまで及んだ。一七七六年、彼は農業上の見聞を広めるため、アイルランドに渡り、農村部を歩いて、その結果を八〇年『アイルランド紀行』(Tour in Ireland) として刊行した。この紀行は彼があらゆるアイルランドの社会階級と接触し、不在地主制の下で貧困生活を送るアイルランド農民の実態を鋭い観察力で描いて、彼の代表作の一つとみなされるに至った。帰国してからの彼は、名声をほしいままにしながらも、これから先何をしたらよいのか不安をいだいていた。彼は自叙伝の中でこう述べている。『これから先何をしたらよいのか思い悩んでいると、ふとアメリカへ移住したらどうかという思いがよぎり、そのことで頭がいっぱいになってしまった』。しかし、彼は気をとりなおし、八三年雑誌『農業年報』(Annals of Agriculture) を刊行し、自ら編集長になった。この『農業年報』は一八一五年に全四七巻をもって終了するが、その間、彼は毎号多量の記事を書いた。この雑誌は刊行されると、ヨーロッパの農業界で大評判であった。各地から農業の教えを乞う人々が次々と彼の許を訪ずれた。ロシアからさえ、エカテリーナ女帝が三人の若者を彼の許に送ってきた程である。このような、言わばヤング詣での中に、あるフランス人の一行がいた。それは農業に関心をいだいた数少ないフランス貴族の一人、リアンクール公 duc de Liancourt の二人の息子とポーランド系フランス人で家庭教師のラゾウスキ Lazowski である。一七八五年、彼らはいわば修学旅行をかねてイギリスにやって来たのだ。ヤングは彼らと会い、ラゾウスキとの知的会話からたちまち意気投合してしまった。それから二年後、一七八七年ラゾウスキはヤングに手紙をだして、自分を傭っているラ・ロシュフコー La Rochefoucault 家の人々がピレネー山脈まで旅行する予定だが、各自馬に乗って行くので金が余りかからないはずであるから一緒に行かないかとさそったのであった。ヤングはフランス農業を調査したいという希望を前々からいだいており、すでに一七六九年フランス語の文献多数に目を通して『フランス国民の現状に関する書簡』(Lettres concerning the Present State of the French Nation) という労作を物して予備知識も充分あったので、

この招きに応じたのであった。

かくて、一七八七年五月一五日、彼は北フランスのカレーに上陸し、フランス紀行を開始したのであった。時にヤングは四七才、見聞記を書くにはすでにイギリスとアイルランドで充分経験を蓄積し、旅慣れて健康であり、使うフランス語はこっけいだという指摘もあるが、一応誰とでも自由に話せる会話力をそなえていた。(7)

註

(4) 以下とくに断わらない場合は、The Autobiography of Arthur Young, edited by M. Betham-Edwards, London, 1898. reprinted, New York, 1967 と飯沼二郎著『農学成立史の研究』御茶の水書房、一九五七年刊の該当する章や節に負う。

(5) Betham-Edwards, Biographical Sketch (in Travels in France), 1889 p. xxxiv.

(6) Constantia Maxwell, Editor's Introduction (in Travels in France) 1929, reprinted 1950 p. xiv. たとえば、Daniel Defoe の『イギリス紀行』(A Tour thro' the whole Island of Great Britain; divided into Circuits or Journies, etc., 3vols., London, 1724-26) を想起されたい。その内容については西洋経済史講座、第五巻史料・文献解題、岩波書店、一九六二年刊、一三八頁ⅢB二七五項を参照。

(7) Maxwell, op. cit., p. xxi

（Ⅲ）

さて、ヤングはどのようなコースをたどってフランス国中を回り、どのような方法で調査したのであろうか。一七八七年には、五月初めから一一月初めまで六ケ月かけて、Orléanais, Berry, Marche, Limousin, Languedoc, Roussillon, Béarn, Gascogne, Guyenne, Angoumois, Poitou, Touraine 等南部を重点に回り、八八年には二ケ月かけて Normandie, Bretagne, Anjou, Maine と西部を回り、八九年六月から九〇年一月末までは Champagne, Lorraine, Alsace, Franche-Comté, Bourgogne, Bourbonnais, Auvergne, Vivarais, Provence, Savoie, Dauphiné といった東部と中央部を回っている。(8) これら三回の旅行中、第二回目にはスペインへ、第三回目にはイタリヤに足を踏み入れている。フランス革命を見撃したのは第

三回目の旅行の時であった。旅行コースと宿泊地は『フランス紀行』の多くの版に付いている地図に遂一しるされているが、一日平均二〇から三〇マイルのスピードで進み、[9]全踏破距離はヤングに言わせると約八〇〇〇マイルに達する。[10]最初の二回は自ら馬にまたがって旅行し、三回目の時は一頭立二輪の幌付軽装馬車、cabriolet を購入して旅行し、イタリヤに行くためにトゥーロンで転売し、イタリヤまで船・らば・ろばを利用したり、徒歩で行った。また、帰りがけにはリヨンから駅馬車を利用した。[11]

この間、彼はさまざまな人々に会っている。しかし、それには一つの秘訣がある。それはある人物に会見すると、その場でその人物から自分の旅程に合せて、行く先々の土地に住む人々宛の紹介状をもらってしまうことにある。[12]この点、彼はフランスにやって来た当初からラ・ロシュフコー家の人々のような国王とすら親しい大貴族の知己を得ていたことは大変有利であったし、パリ農業協会幹事ブルソネ Broussonnet のような顔の広い人物と知己を得ていたことは便利であった。彼らのお蔭で、ヤングは大貴族から聖職者、官僚、商人、学者、軍人まで多くの人々に会って知りたい情報を得ている。また、宿屋では相客と、道中では行商人と、道端では農民や庶民と自由に雑談しており、この意味では網羅的に各階層の人々と会っているのであった。しかし、他方では、ヤングは人々の話を裏書きする資料を集めて目を通している。パリでは時間をかけ、苦労して地図・関税記録・その他の公式記録をあさったし、ラ・ロシュフコー家のリアンクール公爵の所有する図書室を利用させてもらい、革命前後に街に流布した莫大な量のパンフレット、新聞、政治・経済に関する文献、全国三部会の陳情書に目を通し、抜萃文を作ってイギリスに持ち帰って検討を加えるという念の入れ様であった。[13]

註

(8) H. Sée, Introduction p. 10 (dans Voyages en France en 1787, 1788 et 1789; Paris, 1931. Tome I).

(9) Ibid., p. 11

(10) Maxwell, op. cit., p. xxiii

(11) Ibid., p. xvi; Sée, op. cit., p. 10; Travels in France during 1787, 1788 and 1789. edited by Constantia Maxwell,

1950. pp. 235-240. The Autobiography of Arthur Young. pp. 175-176

(12) Maxwell, op. cit., pp. xx-xxi; Sée, op. cit., pp. 10-11

(13) Maxwell, op. cit., p. xxii; Sée, op. cit., p. 11

（Ⅲ）

こうして書き上げられた『フランス紀行』は一七九二年 Bury St. Edmunds で初版が刊行されて以来、今日まで多くの版をかさねてきた。[14] しかし、最も重要なのはヤングが新しく註釈を書き加えて刊行した一七九四年版である。[15] これは二冊本に分冊され、第一巻はロンドンで、第二巻は Bury St. Edmunds で夫々印刷された。今日『フランス紀行』の定本とされているのは、この九四年版のことである。

ところで、『フランス紀行』の構成は二部から成り、第一部は日付の入った日記風観察録、第二部はフランスの土壌から生産力、英仏通商条約の影響、革命の初期段階の実態等を総括的に検討した観察録である。しかし、この第二部は独立した長い論文を成しているので、これまで出版コストをおさえるといった経済的理由から省略されてきた。たとえば、一八八九年刊行の Bohn's Standard Library 版、一九一五年刊行の Everyman's Library 版、一九二九年の刊行 Cambridge 版でも、省略されたり、抜粋されたりして全文を見ることができず、一九七〇年にやっと一七九四年版のリプリントが刊行されて、空白が埋められることになった。一方、フランス語訳は一七九三年 F. Soulès に訳出されて以来、全訳は一八六〇年の M. Lesage 訳、一九三一年の H. Sée 訳と三回訳出されている。しかし、Lesage の訳は誤訳の続出した不完全な訳文で、しかも現在判明している限りでは、日本では小樽商大にしか存在しないのでセーの訳文が上述のリプリント刊行まで、事実上研究者が利用できる唯一の『フランス紀行』の全文であった（ただしセーの訳文には訳しもれや数字の転写上の誤りが少なくない）。

註

(14) 飯沼前掲書二八一―二八三頁において飯沼二郎氏が作成さ

れたリストに筆者が気ついた版及び所蔵施設を付加して作成した。

『フランス紀行』諸版リスト（英・仏・独版）

Travels, during the Years 1787, 1788 and 1789: Undertaken more particularly with a view of ascertaining the Cultivation, Wealth, Resources and National Prosperity of the Kingdom of France (With three maps) Bury St. Edmunds, 1792.〔東大図、東北大図〕

—Reprinted, in 2 vols. (With three maps) Dublin, 1793.〔慶大図〕

—Second Edition, vol. 1 (With two maps) London, 1794. vol. 2, Bury St. Edmund's, 1794.〔慶大図、一橋大図、京大法、九大図、東大農経、京大農経〕

—Reprinted, in 2 vols, New York, 1970

—Reprinted, a few Chapters and the Maps omitted (A collection of voyages and travels by J. Pinkerton, vol. 4, pp. 77–676) London, 1809.

—With an Introduction, Biographical Sketch, and Notes by M. Betham-Edwards (Bohn's Library) London, 1889.

—Second Edition, London, 1889.

—Third Edition, London, 1890.〔慶大図、小樽商大図〕

—Fourth Edition, corrected and Revised, London, 1892.〔一橋大図〕

—Reprinted, London, 1900.〔京大法〕

—Reprinted, London, 1909.〔総研〕

—Reprinted (The York Library) London, 1905.〔京大文〕

—Reprinted, London, 1911.

—Reprinted, London, 1912.〔北大農〕

—Reprinted (Bohn's Popular Library) London, 1915.〔東大図、東北大図〕

—Reprinted, London, 1926.〔北大経〕

Travels in France and Italy, during the Years 1787, 1788 and 1789 (Introduction signed T. Okey) (Everyman's Library) London, 1915.〔東大図、九大図、宇都宮大図、小樽商大図〕

—Reprinted, London, 1934.〔京大図〕

—Reprinted (Bohn's Stand. Lib.) London, 1917.〔慶大図〕

—Edited and Intro., Notes, Appendix, by Constantia Maxwell, London, 1929.〔慶大図、京大経、九大図〕

—Rep., London, 1950.〔慶大図、北大法〕

Voyages en France pendant les années 1787–88–89 et 90, traduit de l'Anglais par F. S. Avec des notes et observations par M. de Casaux (With maps of Route

and Climate) 3 vols. Paris, 1793.

—Seconde Edition (With maps of Soil and Climate) 3 vols. Paris, 1794.〔一橋大図〕

—Nouvelle Traduction par M. Lesage, précédé d'une introduction par M. Léonce de Lavergne, 2 vols. Paris, 1860.〔小樽商大図〕

—Seconde Edition, 2 vols. Paris, 1882.

Observations sur l'état de l'agriculture en France, extraites des Voyages d'Arthur Young, par le C. Silvestre (No place or date)

Voyage en France, Paris, 1930. Par: Les Oeuvres rép. Collection "ailleurs" sous la direction de Pièrre Deffontaines.〔京大経〕

Voyages en France en 1787, 1788, et 1789; première traduction complète et critique par Henri Sée, 3 vols. Paris, 1931. (Les classiques de la révolution française; pub. sous la direct. de A. Mathiez)〔早大図、京大経、東大文社研、小樽商大図〕

Voyages en France dans les années 1787, 1788 et 1789, extraites et présentation par Philippe Bernard, Paris, 1970.

Reisen durch Frankreich und einen Theil von Italien in dem Jahren 1787 bis 1790: Mit einigen Anmerkungen

begleitet von E. A. W. Zimmermann. Nebst einer von Sotzmann gezeichneten Karte, 3 vols. Berlin, 1793–5.〔東大図〕

(15) Maxwell, Editorial Note (in Travels in France), p. xi; Sée, op. cit., pp. 11–12.

(Ⅳ)

さて、『フランス紀行』はどのような性格の史料なのか。すでにヤングの経歴とフランス旅行の動機の検討から、彼が農業問題の専門家で農業の調査を目的に旅行したことが明らかになった。従って、『フランス紀行』が当然農業問題についてくわしい、農業史を中心にした経済史関係の史料としての性格が基本になることは言うまでもない。この点については戦前から周知の事実であり、比較的最近のたとえば岩波・西洋経済史講座第五巻史料・文献解題においても、『フランス紀行』の解説で柴田三千雄氏が指摘しておられる(16)。そこで、ここでは『フランス紀行』の史料的基本性格が経済史とりわけ農業史の史料であるという認識を前提にした上で、なおかつ他のどんな分野の史料となり

うるかを、第一部日記風観察録を材料にして紹介してみたい。

まず、ヤングの物の感じ方及びその表現の仕方を媒介に彼の性格を知ることができる。

たとえば、一～二の例を挙げるなら、一七八七年七月二八日、ラングドック地方を旅行した際、定期市から帰ってくる行商人たちが申し合せたように、背中にしょった荷物に子供への土産物であろうか、小さなたいこをぶらさげているのを見て、家に残してきた自分の末娘ボビン Bobbin を思いだして、行商人たちの子供に対する愛情に共感をいだいたり[17]、八八年九月五日ブルターニュ地方を旅行した際には、貧困に打ちひしがれたある村で、ボロをまとった美少女が棒きれで遊びながら自分にほほえみかけるのを見た時、いたましくて心のつぶれる思いをするように[18]、感受性が強く敏感に反応する。[19]

しかし、この感受性は自然景観や庭園といった自然美を示す光景を見ると最大限に反応する。彼は真線的、幾何学的な人為を感じさせるフランス庭園には心動かされないが、自然の多様性を再生しているかのように映る曲りくねった道のあるイギリス庭園には好意を寄せるし、フランスの野趣を帯た景観には恍惚となる。[20] それは一種独特の感情、言うなれば甘美な自然感情とも言うべきもので、セーが指摘するように、ルソー的、ロマン的な感情と一脈相い通ずるものがある。[21] おそらくそのためであろう、彼はルソーの一大信奉者で、ルソーの死後九年たった一七八七年一〇月、有名なエルムノンヴィルを訪問し、『……死んだ天才の遺骸は物悲しい感じを与える。その感じは名状しがたく、それ故に実際表現すべき言葉もない。私たちはまだ夕暮れ時にその光景を見た。傾きつつある太陽は湖水に長い影を落していて、誰だったか忘れたが、ある詩人が言っているように、しじまが湖面にゆったりとくつろいでいるかのようだ。』とポプラの島のある湖水をうちながめては感傷にひたり、[22] 蛇足ではあるが、イタリア旅行の帰途ドーフィネへの国境いでは、サルジニア王国サヴォア地方（一九世紀に正式のフランス領となる）のシャンベリを通り、好奇心にかられてルソーの人格形成上大きな役割を演じたヴァ

ラン夫人 Mme de Warens の家を見に行き、彼女の死亡証明書（全文の引用あり）まで入手し、『告白録』に述べられているとおぼしき散策の丘をそぞろ歩いて夫人の思い出を胸一杯にいだいて、後年の人々によるルソー詣での皮切りをなし、一九世紀に開花することになるロマン主義の先駆者的役割を担うといった性格の側面もある。[23]

しかし、ヤングの場合、このような物の感じ方を文章にすると、感覚的で余韻の残る表現で読者の心に訴える特色をもっているが、話の先を急ぐ余り、突然ある話を打切って、しかも行すら変えず別の話に移って行く。これは読者にとって実に唐突な感じを受けるし、意味のとりちがいをひき起し、混乱させられてしまう原因になる。これは一八世紀イギリスの読者もが強い不満をいだいた欠点であったらしく、しばしば指摘されている。[24] しかし、彼のこうした文章法にも、自分の関心や感覚以外目もくれず、まっしぐらにつき進む独善的で横柄な性格を感じないわけにはいかないのである。[25]

次には、ヤングの観察と主観的判断を媒介にイギリス国民の特色、言わば国民性を知ることができよう。たとえば、彼は一七八七年六月一四日、トウルーズでブリエンヌ運河を見物し、その出来栄をたたえている。しかし、その運河がほとんど利用されていないのを知ると、たちまち興味をなくしてしまう。[26] 他方、同じ八七年七月二四日、ラングドックで大西洋と地中海を結ぶラングドック運河をみて、見事な工事で大いに利用され活況を呈しているのを知ると、この運河の存在を口をきわめてほめている。[27] これら二つの運河に対するヤングの反応には大きな相違がある。なぜこのような相違が生じたのか。その答えは彼自らだしてくれる。すなわち、八八年八月二一日、ノルマンディー地方を旅行した際、財務総監チュルゴの実兄に会って、植物のコレクションを見せてもらい、彼はこう述べている。『彼は私たちに植物を全部見せて説明してくれたが、主に外来植物を自慢した。役に立つはずだというならともかく、ただめずらしいから自慢するのでは話にならない』。[28] この判断から明らかなように、彼の価値観は事物が役に立つか、立たないかにある実利主義である。しかし、これはヤ

ングだけにみられる独自の主張ではない。これはイギリスの功利主義思想の気運・風潮下で育った人々に共通の特色であり、むしろイギリスの国民性における実利的側面が彼の判断を媒介に明らかになったとみてよいであろう。また、別の事例を切り取って考えてみよう。八七年一一月一日、北フランスでピカルディー運河を見に行った際には、運河の記念碑にぎょうぎょうしく名をつらねる地方総監や監督官や検査官の名前を読んで立腹する。彼に言わせると、『その事業（運河建設）の後盾になってくれた国王の名前と、才能があるが故にその事業を実現できた技師や職人の名前だけを記載すべきなのだ』ということになる。[29] ここには上述の実利主義がはっきり現われているが、一方でフランス式の官僚主義に正面から対立する自由主義が強調されていないであろうか。このような主張を裏ずける事例は枚挙にいとまない程あるが、これをイギリス式の自由主義とするなら、この主張の根底には、国家権力、国家的権威はできるだけ背後にひっこむべしといった市民的発想を感じないわけにはいかないし、王制や封建遺制を残しながらも、すでに市民革命を百年前に実現し、自由主義に一層磨きをかけられたイギリスの国民性を感じないわけにはいかないのである。

次には、自然現象や人文現象の叙述を媒介に歴史地理の史料として利用することができよう。もとより、この歴史地理という分野の学問的対象が何であるかは専門家の間に議論もあろうが、ここでは過去の自然現象と人文現象ということにして話をすすめよう。[30] ヤングは自身が土壌や自然環境と密接な関係にある農学の専門家であったから、自然現象の叙述も実にくわしい。たとえば、くるみの木の葉の色工合で春先に遅霜のあったことを指摘したり、[31] パリの秋空が抜けるように青いことを報告している。[32] またそればかりか、地形の描写ということになると、描写はこまかく正確である。たとえば、パリから南下すると、どこでピレネー山脈がはじめて遠望できるのか、その形状はどうか、読者には一目瞭然となる。[33] ラングドック地方を旅行すれば、どこでピレネーとアルプスの山並を同時に見ることができるのか、その地点を正確に知らせてくれる。彼によると、

その地点はモンペリエ市であり、こう述べている。『一方には、ピレネー山脈の広大な山脈が遠くかすむまで続く。他方には、アルプス山脈の万年雪が雲間をつき抜けて顔をだしている。空が澄み渡ってこれらの遠い物が見える時、その全景は景色のうちで最も驚嘆すべきものの一つである』[34]。しかし、これが人文現象ともなると更に叙述は多岐に渡る。すなわち、一八世紀末には着々と整備されつつあった道路状況、パリでも地方でもきわめて少ない交通量、港湾施設や運河の状況とその将来性、パリ市内の外観やにぎわい振り、ボルドー・ルアン等に顕著な新興住宅街の建設風景、革命下のディジョンで経験したような中央と地方のコミュニケーション不足（地方都市ではブザンソンでもムランでも、カフェには新聞一つ備えられていない）等枚挙にいとまない。しかし、たとえば、ヤングは八七年八月ラングドック地方を旅行した際、耐えがたい暑さに気息奄々としているが、セーによると、その夏のラングドック地方は平年並でとくに異常な点があるわけではなく、涼しい夏しか経験のないヤングがただびっくりしただけであるらしいことや[35]、フランスが森林資源不足に悩まされ、木材の高騰を経験していたにもかかわらず、森林が目につくので木材が豊富だと思い込んでいたり[36]（第二部の森林問題の章では否定している）、トゥルーズで市内見物をしながら、有名な建築物サン＝セルナン Saint-Sernin 教会を見るどころか言及もしないでことたれりとしているような[37]、誤解や不備も少なくないので、事例を批判的に利用するならば、大いに有益であろう。

次には、当時の習俗を知る手掛りになろう。彼は日記風観察録の末尾でフランスの生活様式を総括的に検討している。たとえば、フランス料理がイギリス料理より優れている点や料理の内容、食器やナプキンに至るまでのこまごまとした品物のストック、イギリス人とフランス人の清潔感の比較、中産階層とそれ以下の階層の人々に顕著な服装の貧弱さといったものである[38]。これらはむろんイギリスとの比較において検討されているので、前置きになる説明も多く、そのために一層具体的に理解することができる。しかし、特定の社会階層の習俗についてはというと、それはや

はり農民層一般の習俗についてが一番詳しい。農民の住いの外観や内部、建築方法、地方による相違、食生活、服装、野良仕事の風景等が折にふれて描写される。またそればかりではなく、農民の人に接する態度や容貌、更には願望にまで観察は行き渡る。たとえば、一七八七年九月、ヤングはリアンクールに滞在中リアンクール公と一緒に食事する三人の農民を観察する。『……私は細大もらさず彼らの態度を見ていた。というのも、上流階級人にして大資産をもち、国王の寵愛も深い大貴族を前にして、彼らがどのように振舞うか見たかったからだ。彼らがつつましくはあるが軽卒そうな点もなく、いわんやイギリス人の感じからすると不愉快なこびへつらいもなく、気楽でくったくのない態度をとるのを見てうれしかった。彼らは自分の意見を自由に表明したし、自信をもってそれを固執した』[39]。この三人の農民は広大な土地を借地する農業資本家的な農村ブルジョワであって、平均的な農民ではないから、この事例ですべてを推し計るわけにはいかないが、ある程度雰囲気を知ることができよう。またたとえば、八九年七月一二日、ヤングはロレーヌ州に入ったばかりのとある坂道で一人の農婦に出会う。『この婦人は労苦のため腰がひどく曲り、顔には深いしわがきざまれ、こわばっていたから、近くで見ても六〇か七〇才とみなされかねなかった。ところが、彼女はまだ二八才にしかならないと言っていた。旅行をしたことのないイギリス人には、フランス農村女性の圧倒的大多数の容姿は想像つくまい』[40]。この事例はルソーの告白録において、青年ルソーがリヨン郊外のとある農家で食事をたのんだところ、徴税役人と間違えられて粗末な食事を提供されたが、やがて誤解がとけると、上等のパン・ハム・ブドウ酒・オムレツを給されて、貧困をよそおう農民の悲しい習性を思い知らされる件りと共に[41]、研究者の引用する代表例であるし、上述の農婦が『偉い方が何とかしに来て下さるそうだが、……神様がもっとよくして下さればよいが』と[42]、漠然とながらも生活の改善を期待する件りは農民の願望を示す代表例である。

最後に、ヤングはフランス革命の生証人として革命のなまなましい事実報告をしてくれる。周知のように、フラン

ス革命は一七八九年から九九年まで展開するが、彼と革命の触れあいは、一七八九年六月から九〇年一月末まで約八ケ月で、革命の初期段階であると言えよう。もとより、現在では彼の証言に依拠しなくても、フランス人の手によるさまざまな原史料によって、革命の動向は遂一明らかになる。また、英語で書かれた史料としても、たとえば、当時の駐仏アメリカ合衆国代表モリス総督 Gouverneur Morris の日記のように、八九年三月から九三年一月まで（九二年一月末から四月末まではロンドン滞在）と期間も長く一層詳しいものもある。[43] しかし、彼の事実報告は持ち前の文章力も手伝って、たとえば、革命前後の庶民の習俗を好んで描いた一八世紀の小説家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ Réstif de la Bretonne の『パリの夜』のように、[44] 読者に生き生きとしたイメージを与えてくれる。彼は革命下の諸事件をただ変ったでき事として記述しているのではなく、ラ・ロシュフコー＝リアンクール公 duc de la Rochefoucauld-Liancourt を介して多くの宮廷人や革命初期の愛国者党員と知り合い、他方でラゾウスキやブルソネを介して学者と意見の交換をし、更には自らカフェに集まる街の論客たちの議論をも聞きにでかけており、自分が現に居るフランスの状況が絶対王政の圧制を打倒し、新しい共和政社会誕生のための産みの苦しみの時期にあることを深く理解している。たとえば、八九年六月一五日には、彼は全国三部会を次のように述べている。『二〇〇年に及ぶ専制権力の悪弊を振りはらい、公衆の監視の下で公開の会議を開く一層自由な政体を立ち上って祝福しようとする、二五〇〇万国民を代表する人々が一堂に会した光景は目に見えない火花をちらし、自由を愛する心の感激をたかめる効果をうんだ……』と。[45] それ故、ヤングは革命史の山になる問題や事件には常に注意を払っている。この六月一五日だけでなく二三日にも、ヤングは自ら全国三部会を傍聴して、細大もらさず審議の有様を報告してくれる。[46] 七月一五日には、地方都市ナンシーに到着し、こうしるしている。『パリからの手紙！一切が混乱！大臣更送。ネッケル氏は不平を言わずに王国を去るよう命ぜられる。ナンシーの人々に及ぼした影響は大きかった。手紙が着いた時、私はウ

ィルメ氏と一緒に居た。しばらくの間、ウィルメ氏の家は間合せる人々で一杯になった。皆が口をそろえて言うことには、それは決定的なニュースで、大暴動をひき起しかねないとのことだった[47]。これはネッケル失脚のニュースを初めて知ったナンシー市民の興奮を伝えた件りであるが、以後地方を旅行しながら、次々に起る動きが地方でどのように受けとめられているかを報告する。バスチーユ陥落のニュースを聞いた翌日七月二一日の夜、彼はストラスブールの市庁舎前を通りかかって、市民による市庁舎乱入を見撃し、細大もらさず報告するし、八月四日ブルゴーニュ州境オータンで宿屋に泊ると、七月以来熱病のように農村部に広まった強盗団来襲の所謂大恐怖におののく同宿の客たちが最新のニュースを求めて彼の許に殺倒して来たことを述べているし、八月一二日クレルモンで封建制廃止の宣言に接し、大よろこびの人々を見撃する[48]。しかし、残念なことに、たとえば八月二六日の人権宣言や一〇月五日のヴェルサイユへの大行進のような事件は、彼が情報網の薄いプロヴァンス地方やイタリヤを旅行していたので記述からもれている。それ故、このような記述もれを他の史料で補完しながら利用すれば、利用価値は大きいであろう。

註

(16) 西洋経済史講座、第五巻、一九七—一九八頁ⅢC二四七項。

(17) Maxwell, Travels in France., p. 46

(18) Ibid., p. 109

(19) ヤングの愛情はとくに末娘 Martha（愛称 Bobbin）に注がれる。一七九七年、この娘を病気で失ってからは性格が一変し、彼は仕事のかたわら身なし子たちとよく食事を共にするようになる。The Autobiography of Arthur Young, p. 279 と pp. 319-320 及び Betham-Edwards, Biographical Sketch, p. xlvii 参照。

(20) Sée, Introduction p. 7

(21) Ibid., p. 7 c. f. 平岡昇『「自然感情」の表現とその思想的背景（上）——十八世紀フランス文学における——』「文学」一九七三年九月

(22) Maxwell, Travels in France., pp. 76-77 "The remains of departed genius stamp a melancholy idea, from which decoration would depart too much, and accordingly there is little. We viewed the scene in a still evening. The declining sun threw a lengthened shade on the

lake, and silence seemed to repose on its unruffled bosom; as some poet says, I forget who."

(23) Young, Travels, during the Years 1787, 1788 and 1789, reprinted 1970, New York, Tome I. p. 272; Jacques Voisine, J.-J. Rousseau en Angleterre à l'époque romantique, les écrits autobiographiques et la légende, Didier, 1956. pp. 123-24.

(24) Maxwell, Editorial Note, p. xii 及び Editor's Introduction, p. xviii

(25) Maxwell, Editor's Introduction, p. xix.

(26) Maxwell, Travels in France., pp. 27-28.

(27) Ibid., pp. 40-41

(28) Ibid., p. 101 "he showed and explained to us all his plantations, but chiefly prides himself on the exotics; and I was sorry to find in proportion not to their promised utility, but merely to their rarity."

(29) Ibid., p. 93 "no names ought to be permitted but those of the king, whose merit patronizes, and the engineer or artist whose genius executes the work."

(30) さしあたり歴史地理講座、第一巻、総論・ヨーロッパ、朝倉書店、昭和三四年刊、三一―三二頁及び W. Gordon East, The Geography behind History, New York, 1965. pp. 1-14 を参照。

(31) Maxwell, Travels in France., p. 16

(32) Ibid., p. 79

(33) Ibid., p. 24

(34) Ibid., p. 44 "On one side, the vast range of the Pyrenees trend away till lost in remoteness. On the other, the eternal snows of the Alps pierce the clouds. The whole view one of the most stupendous to be seen, when a clear sky approximates these distant objects."

(35) Ibid., pp. 49-50. pp. 51-52

(36) Sée, La France économique et sociale au XVIIIe siècle, Paris, 1967, p. 34 拙訳『フランスの社会構造』、三六―三七頁。

(37) Sée, Introduction (dans Voyages en France) p. 6.

(38) Maxwell, Travels in France., pp. 262-265.

(39) Ibid., p. 75 "I watched their carriage narrowly, to see their behaviour in the presence of a great lord of the first rank, considerable property, and high in favour; and it was with pleasure that I found them behaving with becoming ease and freedom, and though modest, and without anything like flippancy, yet without any obsequiousness offensive to English ideas. They stated their opinions freely, and adhered to them with becoming

confidence."

(40) Ibid., p. 173 "This woman, at no great distance, might have been taken for sixty or seventy, her figure was so bent, and her face so furrowed and hardened by labour; but she said she was only twenty-eight. An Englishman who has not travelled cannot imagine the figure made by infinitely the greater part of the country-women in France." たとえば、イポリト・テーヌ『近代フランスの起源』（角川文庫）下巻二八八頁、平岡前掲書一〇一―一〇二頁。

(41) J.-J. Rousseau, Les confessions, Bibliothèque de la Pléiade. Paris, 1959, pp. 163-164 たとえば、イポリト・テーヌ前掲書下巻二九三頁、桑原武夫編『ルソー』（岩波新書）一〇二頁、ジョルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー『フランス文化史II』（人文選書）二〇七頁、平岡前掲書一〇〇―一〇一頁、小林善彦『ルソーとその時代』（大修館）七九―八〇頁。

(42) Maxwell, Travels in France., p. 173 "It was said, at present, that something was to be done by some great folks for such poor ones, but she did not know who nor how, but God send us better, car les tailles et les droits nous écrasent."

(43) Gouverneur Morris, A diary of the french revolution. 2vols., 1939, reprinted 1972

(44) Réstif de la Bretonne, Les nuits de Paris, ou le Spectateur nocturne. Londres, Paris, 1788-1794 植田祐次訳『パリの夜』、現代思潮社、一九六九年刊。

(45) Maxwell, Travels in France., p. 142 "The spectacle of the representatives of twenty-five millions of people, just emerging from the evils of 200 years of arbitrary power, and rising to the blessings of a freer constitution, assembled with open doors under the eye of the public, was framed to call into animated feelings every latent spark, every emotion of a liberal bosom;"

なお、この文には飯沼氏による訳文もある。飯沼前掲書二七六頁。

(46) Maxwell, op. cit., pp. 142-144 pp. 152-153.

(47) Ibid., p. 176 "Letters from Paris! all confusion! the ministry removed. Mons. Necker ordered to quit the kingdom without noise. The effect on the people of Nancy was considerable. I was with Mons. Willemet when his letters arrived, and for some time his house was full of inquirers; all agreed, that it was fatal news, and that it would occasion great commotions."

(48) Ibid., pp. 182-183. p. 200, p. 207

（V）

以上、史料的性格を検討したが、『フランス紀行』の当時における評価や影響を若干指摘しておきたい。

もとより、革命前や革命下のフランスを記述した旅行記は数多くあるわけだが、たとえばロシア人 Karamzine の旅行記はパリとパリの生活しか述べていないし、イギリス人 Dr. Rigby の旅行記にしても、パリからディジョン経由でリヨンまで駅馬車に乗った体験から書いたにすぎない。[49] ヤングのように、コルシカ島以外すべての州を三年とかけずに踏査し、農業問題を視点に考察した旅行記は存在しないのである。おそらく、当時の読者もこの点を評価したのであろうか、ヤングの自叙伝によると、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世やナポレオンも読者として賛辞を寄せたのであった。[50] しかし、何よりも当時の評価を証明する事実は、一七九三年フランス語訳がでると、時の革命政府は、とくに二万部という当時としては空前の部数を印刷させて、無料で各自治体に配布したことにある。[51]

また、この『フランス紀行』は作家にも影響を与えることになった。たとえば、スタンダールは旅行記を愛読した作家であるが、一八一〇年三月三一日の日記でこう述べている。『A・ヤングの旅行記を読むと、それを手にして、フランスを旅してみたくなるが、よっぽどその気でかからないと、彼ほどの喜びを味えはしない。……さまざまな地方におけるフランス的性格を描いてみたいものだ』。[52] 結局、この念願は三〇年近くたって実現されることになり、その結果生れたのが『漫遊客の手記』と『南仏旅行』である。[53] とくに前者は産業革命の進行するフランス各地を鉄商人になりすました作者が旅行しながら、習俗や生活を記録していった作品で、一九世紀前半期のフランス社会史にとって貴重な史料をなしている。[54]

註

(49) Sée, Introduction (Voyages en France) p. 27 c. f. N. Karamzine, Voyages en France, 1789～1790. trad. A. Legrelle, Paris, 1885; E. Rigby, Letters from France in 1789. Ed. Lady Eastlake. 1880 なお、ヨーロッパに

おける旅行の増加については、P. Hazard, La Crise de la Conscience européene (1680-1715), Paris, 1935. 野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機』法政大学出版局、一九七三年刊、一一～一五頁及び巻末の参考文献を、また一七一五―一七八七年を対象にした旅行記のリストについては、D. Mornet, Les origines intellectuelles de la révolution française, Paris, 1933. 2°éd. 1967. pp. 516-517 を参照。

(50) The Autobiography of Arthur Young, p. 224 と pp. 467-468.

(51) Maxwell, op. cit., p. xvii

(52) Stendhal, Oeuvres intimes, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1955, pp. 910-911 "A. Young réveille le désir de voyager en France, son livre à la main, mais il faudrait aussi avoir une passion dans le coeur pour y trouver autant de plaisir que lui……Nous ferions une description du caractère français dans les diverses provinces du pays."

(53) Mémoires d'un touriste, 1838 と Voyage de Bordeaux à Valence (別名 Voyage dans le Midi de la France), 1938.

(54) Ferdinand Rude, Stendhal et la pensée sociale de son temps, Paris, 1967. pp. 226-247 に詳しい。

(Ⅵ)

さて、最後にこの稿を閉じるにあたり、現在の研究水準における『フランス紀行』の史料としての利用状況を検討して、結語に代えたい。

もとより、『フランス紀行』を史料として利用した研究は冒頭でも触れたようにトクヴィル以来無数にあり、今ここに全体を検討する能力もエネルギーもない。そこで、フランス革命史研究において一時代を支配し、現在もなお影響力をいささかも失っていないルフェーブル史学の主な労作を例に検討しておこう。(55)

周知のように、G・ルフェーブルは農村経済史を専攻して登場した研究者であった。『フランス紀行』がフランス農業の調査を目的としていた以上、史料的性格からいって、彼の研究に充分合致するものであり、彼が大いに利用したであろうことは当然予想できる。彼の学位論文『フランス革命下のノール県の農民』は戦後一九五九年イタリヤ

のバリ Bari で復刊されたが、索引はおろか原註すらも印刷費倹約のため省略されており、本文のみでも九〇〇余頁の大冊にヤングの引用を探求するすべもない。[56] 一九七二年、今度はパリから初版と同じように原註や図表もおさめた文字どおりの復生版が刊行された。この版でも人名索引はないのでヤングの引用を探し求めることは断念したが、参考文献の項には、Lesage 版の『フランス紀行』が挙げてあり、ヤングの挙げる数字だけしか利用しなかったと断ってある。[57] では、同じ農業問題を扱った『恐怖政治期の農業問題』ではどうか。[58] もとより、これは題名が示すように、『フランス紀行』の対象とする時期よりあとの問題であるが、農業経営上の一形式「定額小作制」の検討に三ケ所利用されている。

以上が農業問題固有の論考における利用状況であるが、次には農業問題だけでなく、商工業や都市生活も対象にした『オルレアネ研究』においてはどうか。[59] 引用は上下両巻に二一ケ所、うち二〇ケ所が上巻に集中している。上巻では、第一章のオルレアネの農村部における自然環境と農民の生活状態の項と第四章流通関係の項に集中し、たとえばソローニュ地方の説明では囲込み地に関連して引用され、流通関係の項では散在的ながらオルレアン市の人口数や家蓄・農産物の価格といった数字で利用されている。また、都市の特殊研究『アンシアン・レジーム末期と革命初期のシェルブール』ではどうか。本文に二ケ所引用され、シェルブールの軍港建設に伴なう活気の存在とヤングの経験した不衛生かつ不正な宿屋の状況説明を引用している。[60] 他方、社会史的な性格の一層強い『大恐怖』ではどうか。[61] 人名索引がないので筆者の見落しもあろうが、一一ケ所で引用されている。しかし、そのうちの一つは『イタリヤ紀行』からの引用なので、正味一〇ケ所である。それらの引用はほとんど経済問題とは無関係で、たとえば、八九年七月一二日に坂道であった例の農婦の願望、ストラスブールからブザンソンを経由してディジョンへ向った東部旅行で経験したニュース不足、七月二四日コルマールで耳にした王党派的言辞等農民習俗や革命の証言ばかりである。[62] また、『フランス革命研究』に収録された諸論文ではどうか。

一九三四年に『フランス革命史年報』に掲載され、この論文集に再録された『革命的群衆』において、二ケ所の引用がある。[63] 一つは農民が自分の生産物を市場に売りに行くのは楽しみのためもあるのであって、時誼を失なってもなお野菜や玉子をもって出かけて行く農民をばかばかしいとみたヤングの合理的判断を非難するために利用し、今一つは八九年七月二六日、フランシュ・コンテのリル＝シュル＝ル＝ドウ Lisle-sur-le-Doubs でヤングが第三身分の花形帽子をもっていないことをとがめられ、領主であったら絞首刑にされると聞かされる、地方都市の革命的雰囲気を伝える事例として引用している。

最後に、総括的な論考、『八九年』と『フランス革命』を検討しよう。周知のように『八九年』はフランス革命一五〇周年を記念して書かれたフランス精神の激励書（第二次大戦中ヴィシー政府下で刊行）であり、註も索引も付けない研究書の態様をとらない本である（革命を構造史的に考えた場合、本書の意義は大きい）。[64] 本書には、筆者の気ずいた範囲では『フランス紀行』の引用は存在しない。他方、『フランス革命』には、彼がR・ギュイヨと Ph.・サニャックと共著で一九三〇年に刊行した版と彼が一人で一九五一年に全面的に書き改めた版の二種類がある。まず、前者では、索引にヤングの名はなく、気ずいた限りでは『イタリヤ紀行』からの引用だけである。[65] 後者では、アーサー・ヤングの名で調べると、三ケ所に引用されていることになっている。[66] しかし、三八頁にはヤングの名が見当らず、八三頁にはイギリスの詩人（別人）が登場し、六四三頁のみ農業学会の言及でやっとヤング本人が現われる始末である。そこで実際に本文に当ると、見落しもあろうが、一三八頁に例の農婦の願望が引用され、これが唯一の事例であった。

以上の検討から、ルフェーブル史学における『フランス紀行』の利用状況は、予想外に農民習俗や革命の証言としての利用が多いことが明らかになった。しかし、これはルフェーブルが農業経済史の史料としてより、農民習俗その他の史料として重視した結果であると断定することにはならない。なぜなら、『フランス紀行』は全国的な規模で、

枠組的に農業問題を扱ったのに対して、ルフェーブル史学はノール県（アンシャン・レジーム下では、フランドル地方）やオルレアネ地方を詳細に手堅く検討し、しかも時代的に多少ずれた時点にポイントを置いているといった相違があるからである。

註

(55) James Friguglietti, Bibliographie de Georges Lefebvre, Paris, 1972. pp. 9-12 を参照。

(56) G. Lefebvre, Les paysans du Nord pendant la Révolution française, Bari, 1959. xxvii+923p.

(57) G. Lefebvre, Les paysans du Nord pendant la Révolution française, Paris, 1972. xxv+1013+v. p. xi

(58) G. Lefebvre, Questions agraires au temps de la Terreur, Paris, 2eéd. rev. et aug., 1954, iii+274p.

(59) G. Lefebvre, Etudes Orléanaises, t. I. Paris, 1962, 276p. t. II. 1963

(60) G. Lefebvre, Cherbourg à la fin de l'Ancien Régime et au début de la Révolution, Caen, 1965. 296p.

(61) G. Lefebvre, La Grande Peur de 1789, Paris, 1932, 272p.

(62) Ibid., p. 45, p. 81, p. 101

(63) G. Lefebvre, Foules révolutionnaires (dans Etudes sur la Révolution française, Paris, 1954. pp. 371-392) p. 377. p. 383.

(64) G. Lefebvre, Quatre-vingt-neuf, Paris, 1970.

(65) G. Lefebvre, R. Guyot et Ph. Sagnac, La Révolutionfrançaise, Paris, 1930. 583p. イタリヤの例は p. 17

(66) G. Lefebvre, La Révolution française, Paris, 1963. 698p.

〔本稿は一九七三年八月六日、第一七回北海道教育大学史学会大会（札幌）において発表した後、修正、加筆したものである〕。